

# 19世紀後半のマサチューセッツ州 における女性の高等教育拡大運動

坂 本 辰 朗

## 目 次

1. はじめに—問題の所在と本稿の課題
2. 「協会」設立以前の  
マサチューセッツ州の女性運動
3. 「協会」の設立とその基本的性格
4. 「協会」の運動  
—制度変革への挑戦と敗北
5. 「協会」の運動への  
新たな評価の必要性とその視点
6. 「協会」の知的遺産の評価の必要性



# 19世紀後半のマサチューセッツ州 における女性の高等教育拡大運動

坂本辰朗\*

## 1. はじめに — 問題の所在と本稿の課題

1891年11月28日。ボストン大学においては、女性の大学教育を支援するマサチューセッツ協会 (Massachusetts Society for the University Education of Women以降、「協会」と略記) が主催する講演会が開催されていた。講演を行ったのは当時ブリン・マー・カレッジに留学中であった津田梅子であり、演題は、「教育と啓蒙 — 日本女性は現在何を必要としているか」であった。この「協会」の記録によれば、「講演者は、アメリカの大学で教育を受けるという恩恵に浴した日本の女性は、他のどのような外国人にとっても得難い知識を持って自身の国に帰り働くことができるという事実を強調した」としている<sup>1)</sup>。

19世紀後半のマサチューセッツ州においては、今日私たちが知っているすべての形態の女性の高等教育 (共学・別学・付属女子大学) が可能になっていた。これを可能にするためには、多様な人々による女性の高等教育の拡大・支援の運動が必要であったわけであるが、これらの運動を支えたのは主として女性の組織であった。このような組織の中でも当時ボストンを中心に最大の会員数を集めた組織が、上述の「協会」であり、その会員名簿には、ルーザ・メイ・オールコット (1832-1888, 『若草物語』で知られる小説家) をはじめとする女流文筆家や、エリザベス・ピーボディ (1804-1894, 著述家, 教育改革家, アメリカ最初の幼稚園の設立者) などの教育者, ルクレチア・モット (1793-1880, クエーカー聖職者, 奴隷制廃止論者, 1848年のセネカ・フォールズ会議の発案者の一人), アビィ・メイ (1829-1888, 社会改革家, 婦人参政権論者) やメアリ・ヘメンウェイ (1820-1894, 慈善事業家, ボストン家政師範学校を設立) 等の女性たちが名を連ねていた<sup>2)</sup>。

1970年代以降のフェミニスト教育史研究者たちは、アメリカで1870・80年代に高等教育を受けた女性たちを、女性の高等教育の「第一世代」と呼んでいる。伝統的なアメリカ高等教育史では、女性高等教育の起源を1833年のオーバーリン・カレッジにおける共学制の開始をもってそれとするのが通例であったにもかかわらず、フェミニスト教育史研究者たちが敢えて、70・80年代に高等教育を受けた女性たちを「第一世代」と規定した理由は、この時代になって初めて、女性の高等教育の機会が男性のそれと質的な意味で比肩しうるものになった (1865年のヴァッサー・カレッジの設立がその嚆矢) というだけでなく、この時代に高等教育を受けた女性たち、とりわけ伝統的なアメリカ高等教育史では保守的な教育を行っていたとされる女性のみで教育を受けた女性たちが、ジェンダーに関する諸問題 — 女性と男性の知的平等についての問題、社会において女性が男性に対して従属的で男性の役割を補償する地位に置かれているという問題、あるいは、「家庭性イデ

\* 創価大学 教育学部助教授 (大学教育研究センター客員研究員)

オロギー (ideology of domesticity)」に関する問題——を初めて自覚的に思考し、それによって、例えば因襲的な結婚を拒否するという形態で、この「家庭性イデオロギー」の呪縛から自らを解き放つことができた、ということなのである<sup>3)</sup>。この時代はコモンスクールやハイスクールの発展に見られるように公教育の拡大期であり、それは女性の教育機会の拡大と教師としての女性への多大な需要を生み出した。また南北戦争の直接的影響により、女性人口が男性人口をはるかに上回るという人口動態的变化が原因で生涯を独身で過ごす女性の“自立”のためという女性の高等教育の必要性・存在理由が確立されつつあった。一方、モリル法成立以降、高等教育全般の差異化の開始と同時に女性の学生の比率の劇的な増加が起こり、これがもとで女性の高等教育の是非論争が開始されたが、これは、「女性の学生の第一世代に対して、女性は男性と知的に同等であるということを世界に証明するという、自分たちの果たすべき中心的な役割を異常なまでに意識させ」<sup>4)</sup>、彼女たちにジェンダーについての鋭敏で自覚的な思考を促すことになったのである。

フェミニスト教育史研究者たちによる研究成果は、従来の女性高等教育史研究における通弊の一つを克服するものであった。すなわち、高等教育機関への女性のアクセスの機会の有無のみに目を奪われる——オーバーリンへの入学を女性の高等教育の開始とする通説はその典型である——のではなく、むしろ、女性が男性のみに開放されていた高等教育にアクセスの機会を得た後に、どのような教育的な扱いを受け、どのような教育的理想像に向かって教育をされたのかという、高等教育機関内部での女性の経験の諸側面に亘る研究が、そして彼女たちの人生選択に対する高等教育の影響に関する研究が、アクセスの問題以上に重要である。このためにはマニスクリプト・レベルにまで遡った史・資料の発掘と集積によって、歴史に埋もれてしまった女性たちの声を復元することが必要であろう<sup>5)</sup>。

本研究もこのようなフェミニスト教育史学の流れに属するものであり、19世紀後半のマサチューセッツ州において、「第一世代」の母や叔母や姉の世代にあたる女性たちが、女性の高等教育機会の拡大のためにどのような活動を行ったのか、とりわけ、ひとたび女性が高等教育機関に受け入れられた後に、これらの女性の学生たちを支援し激励するためにどのようなネットワークづくりをしなければならなかったのかを、上記の「協会」の活動を事例として明らかにすることを第1の課題としている。では何故、「第一世代」以前の世代の女性たちへ注目するのか。その理由は、70・80年代に高等教育を受けた女性たちを「第一世代」とする上述のフェミニスト教育史研究の解釈を踏襲するとしても、それでは何故「第一世代」は「ジェンダーについての自覚的な思考」が可能となり「自分たちの果たすべき中心的な役割を自覚」するに至ったのか、という論点は先行研究では十分に解明されていないからである。この論点について本論文の執筆者は、これまでの先行研究が指摘するような親からの教育的働き掛けや師弟関係のみでは説明できないと考える<sup>6)</sup>。確かに、本稿が扱うボストン大学の例にとれば、マリアン・タルボット（後出）や1877年に合衆国で最初に女性のPh.D.取得者となったヘレン・マッギル（1853-1944、父はスワスマアの学長）、あるいは、その語学的才能によって移民の救済事業を行うと同時に優れた翻訳を残したエヴァ・チャニング（1855?-1930、ウィリアム・エラリィ・チャニングの孫娘。明治期に久保天隨が『酔人の妻』として初めて重訳紹介した『リーンハルトとゲルトルート』の英語抄訳は彼女の仕事である）などの卒業生は、親の教育

的働き掛けを無視することができまい<sup>7)</sup>。だが、「第一世代」の女性たち全てが知的な家庭で育った訳ではないし、同様に師弟関係からの影響のみでは、彼女たちの社会的使命の自覚を説明できないであろう。本稿が「協会」の活動に着目する理由はまさにここにある。そして、“華々しい”制度的変革に成功したか否かという観点から教育史を見てきた先行研究では不当にも見落とされてきた、「協会」の女性たちがアメリカ高等教育史に残した知的遺産、これを正當に評価することが本稿の第2の課題である。

これらの二課題を解明するため、本論文は、以下のような構成を取る。まず、本論第2章では、「協会」を誕生させるに至ったマサチューセッツ州の様々な女性運動の基本的特徴を指摘する。続いて第3章では「協会」設立の経緯を説明する。次に第4章では、「協会」が行った運動のなかでも特に世間の注目を集めたものの一つである女性教授講座設立運動を例にして、「協会」が社会的に注目を集めるような制度変革に挑戦してどのような敗北をするに至ったのかを跡づけてみる。第5章では、先行研究における「協会」に対する評価が、本論第4章でみた女性教授講座設立運動のような大きな制度変革の成否に目を奪われた一面的なそれであることを示すために、先行研究で見落とされてきた、「協会」の女性たちの隠れた、しかし重要な運動の意義を論じる。そして第6章では、「協会」がアメリカ高等教育史に残した知的遺産を明らかにして本論の結びとしたい。

## 2. 「協会」設立以前のマサチューセッツ州の女性運動

**女性の領域というイデオロギーの二面性** 奴隷制廃止運動と禁酒運動とをその典型とする南北戦争前の女性による様々な慈善運動（主要な担い手は白人の中産階級のプロテスタント）は、女性が役員を務めたり聴衆の前で演説する等その前面に出ることができる例外的な社会運動であった。だがこれは、これらの運動が最初から女性の社会的・政治的参加を積極的に肯定したという意味ではない。女性の参加が公認された理由は、女性の領域 (woman's sphere) としての家庭、そこにおける女性の道徳的卓越性というイデオロギーにもとづいたものであり、それは、確かに一方では女性を家庭に閉じ込めるために機能したものの、他方では「女性の道徳的卓越性による社会の浄化」という形で様々な社会活動を正当化するために使われ、女性であるという共有の経験に基づいた意識を形成する基盤を提供したのである<sup>8)</sup>。これらの運動に参加した女性たちは、女性同士の絆を強め社会運動を組織するという経験を積んだと同時に、自分たちの果たした指導的役割と女性の社会的政治的立場とのギャップを認識することになった。彼女らは戦争の終結とともに、産業化や都市化、移民の流入などの新たな社会問題への取組みを開始した。一方、戦前の時代からの急速な商業発展は、地域社会の地方的な孤立を徐々に蝕み、階級や血統や伝統といった、それまでの社会的地位決定のための力を衰えさせつつあった。人々は、一般的に、これらの伝統的形態の社会制度の斜陽はさしたる抵抗なく受け入れたものの、社会の無秩序に対する最後に残った保障としての性による区分に固執することになったのである<sup>9)</sup>。

**マサチューセッツ州における女性運動** 1865年、ボストンにおいてアメリカ社会科学協会 (ASSA) が結成された。社会についてのデータを集め分析しそれによって戦後の諸社会問題の解決

の方途を探るべく、改革を志向する中産階級の人々を糾合したこの団体は、その発足時から女性を要職につけることで、そのフェミニスト的性格を鮮明にしていた<sup>10)</sup>。このASSAに関係した二人の女性、エミリー・タルボット（1834-1900、慈善事業家・社会改革者）とアビィ・メイ（前出）は、後に「協会」においてもキー・パースンとなるのである。さらに1868年には、ニューイングランド婦人参政権協会（NEWSA）が結成され、ジュリア・ウォード・ハウ（1819-1910、作家、『ウーマンズ・ジャーナル』編集者）が会長に就任する<sup>11)</sup>。また、同年、後にマサチューセッツ州における女性の高等教育の機会の拡大に大きな貢献をすることになるニューイングランド女性クラブ（NEWC）が、キャロライン・セヴァランス（1820-1914）らによって結成されている<sup>12)</sup>。この女性クラブは、一方では婦人参政権や学校参政権（school suffrage）を、他方では服飾改良や園芸に至るまでその活動目標を掲げ、女性同士で学び合い友情の輪を広げることで、「女性の集合エネルギーを、個人主義的・競争的な男性世界を変革するための回路に流し込んだ」<sup>13)</sup>のであった。その会員たちは、女性には参政権はもちろん教育委員会選挙の投票権すら与えられていないこの時代、ボストン学校委員会に1873年には委員を4人、翌74年の選挙では6人を送り込むことに成功した<sup>14)</sup>。このうち5人の委員が後に「協会」に参加することになる。このように、19世紀後半のマサチューセッツ州では「協会」が結成される以前に、女性の高等教育の拡大・支援のための社会的諸条件が整えられつつあったのである。

### 3. 「協会」の設立とその基本的性格

「協会」の設立は1877年である。その結成には、当時のボストン大学（1869年創立のメソヂスト系大学）の学長ウォーレン（William Fairfield Warren, 1833-1929）が深く関わっていた。彼は、女性の高等教育の熱烈な支持者として知られており<sup>15)</sup>、その大学『年報』において、「ボストン大学は、若い女性と男性に対してまったく同じ条件であらゆる善い機会を提供するものである。本大学は女性を、ただ単に学生の席だけでなく教授の座にも歓迎する」と述べていたのである<sup>16)</sup>。1876年11月、ウォーレン学長は、メアリ・クラフリン夫人——婦人参政権の支持を表明（1871年）した最初のマサチューセッツ州知事<sup>17)</sup>の夫人——をはじめ、ボストンの指導的な立場にある主だった女性たちに対して、ボストン大学で学ぶ女性の学生たちへの援助を訴えたのである。これらの女性たちは、当時、エドナ・チェイニィが「ボストンの女性たち」と呼んだような、ボストン・ブラーミンの趣味と育ちの良さを兼ね備え、建国者の直系として、社会改良への自覚と責任感に溢れていた女性たちであり<sup>18)</sup>、彼女らは、同時に、バーバラ・ウエルターが定式化した19世紀中葉における「真の女性らしさ（True Womanhood）」の属性——敬虔、純潔、柔順、家庭的であること——を備えた女性たちであった<sup>19)</sup>。このウォーレン学長の訴えが契機になって結成されたのが「協会」であった。「協会」は、その当初は、ボストン大学内部の組織であったが、1877年2月に、女性の大学教育を支援するマサチューセッツ協会と改称し、同年4月には州よりチャーターを獲得して州全体の女性の高等教育の拡大と支援の運動にとりかかる。「協会」は、その組織の目的を、一つには、大学在学中の「貧しい若い女性を援助すること」としていたが、同時に、「女性の高等教育一般の振興も、ま

た、会員個人の向上をも目指すものとする」<sup>20)</sup>としていた。

#### 4. 「協会」の運動——制度変革への挑戦と敗北

1878年初頭、「協会」は、ボストン大学の教養学部にて女性教授の講座を設置するための運動にとりかかる。「協会」は、教授講座委員会を発足させ、講座設置のための基金募集のパンフレット「ボストン大学教養学部への女性教授の講座の寄付」を作成し、同時に、ボストンの主要新聞にその趣旨をアピールする。これを受けた『ボストン・デイリー・アドヴァタイザー』は、このアピールの概要を紹介した後、「女性の教育についての一般の人々の関心には驚くべきものがある。これは地域的あるいは全国的な一時の流行といったものでは決してない。それは、全世界で起こっている一般的な異議申し立てであり健全な反抗である」として、これをイギリスのケンブリッジ、オクスフォード、ロンドンの各大学における女性への高等教育開放の例を挙げつつ説明している<sup>21)</sup>。

このパンフレットは、まず最初に、「ボストン大学は女性に対するいかなる形での差別もないように設立された。女性はずでに理事会にも代表を送り、全教員の中に3人、さらには視察委員会の中にも3人含まれている。すべてのスクール、カレッジでは、女性は学生として男性と同じ権利と特権を持っている」として、両性の平等という点でのボストン大学の先進性に言及した後、同大学に「女性がいることが、男性だけのカレッジのそれとはまったく異なる雰囲気とマナーを創ったのである」としている。続いて、「現在、大学全体で165人の女性が在学しており、その内39人が、教養学部で古典学科を勉強している。このカレッジはさらに教授を必要としているが、資金の不足のために理事会はこれ以上のサラリーを払うことが出来ないでいる。女性の大学教育を支援するマサチューセッツ協会のメンバーは、ボストン大学のリベラルな創設を評価し、同カレッジへ常任の女性教授の講座をつくる機会を逃したくないと願うものである」としている。必要な寄金は4万ドルであり、もし5万ドルが集まれば女性教授に加えて女性講師の講座をも設立可能としており、以上のような講座設立の意義と趣旨はボストン大学理事会も既に了承済みとして理事会からの回答の一部を引用している。女性教授は「学識も人格も高い」だけではなく「女性的なテリカシーと矛盾することなく、また、女性的なテイストに合った」人物であることを期待している<sup>22)</sup>。

募金運動は最初のうちは順調にスタートしたかのように見えた。ジェイムス・フリーマン・クラーク(1810-1888, ユニテリアン派牧師, 文筆家)は、早速、エミリー・タルボットに運動の支援と100ドルの寄付の確約を述べた書簡を寄せている<sup>23)</sup>。『ウーマンズ・ジャーナル』も、「一人の女性をこの名誉ある地位につけるために多くの女性たちの力で応援しようではないか。・・・僅か50セントを贈るのを惜しむ人が一人もいませんように。委員会も、数人の裕福なレディのみが寄付をする以上に多くの女性たちが援助をしてくれることを承知しているのである」<sup>24)</sup>と好意的な記事を掲載する。さらに、『ニューイングランド教育誌』は、講座設立キャンペーンを紹介しつつ、「この募金に対して、すでに多くの寄付申し込みが寄せられており、女性たちは年末までにも教授基金を獲得する見込みである」<sup>25)</sup>としている。

だが、「協会」の運営委員の一人で当時のベストセラー小説家であったエリザベス・スチュアート・

フェルプス（1844-1911、同名の母親も小説家）は、エミリー・タルボット宛ての書簡で以下のように運動の問題点を指摘していたのである。

「誰が講座の担当者になる予定なのでしょう？ カレッジの基金を集める人々は、片手には大義名分を、もう片方の手には候補者名を持って行かねばなりません。…私の考えでは、あなたにとって第一のポイントは、アポイントメントを取り付け（冗談を言っているわけではありません！）、それを非公式にせよ理事会に承認してもらい、さらにそれを非公式に当の女性に受けてもらい、その後にお金を手に入れることでしょう」<sup>26)</sup>。

すなわち、この計画は熟慮と慎重な配慮の上で決定されたのではなかったのである。事実、「協会」の議事録には、この基金募集のためのパンフレットの文面をめぐって、運営委員の一人であるケイト・ガネット・ウエルズ（1838-1911、社会改革者、1884年以降は反・婦人参政権論者のリーダーの一人となる）とアニー・ジョンソン会長との間での議論の応酬があったことを記録している<sup>27)</sup>。それは集まった募金の額にも反映していた。「協会」は、1879年度の年報ではそれまでに集めた募金総額を3,000ドルと報告している<sup>28)</sup>。1879年2月1日付の『ウーマンズ・ジャーナル』誌には再び、「女性の教授講座」と題して協会のパンフレットの内容が掲載されるが<sup>29)</sup>、この効果は殆どなかったようである。翌1880年度の年報では、募金総額を3,119ドルと報告しなければならなかったからである<sup>30)</sup>。この金額はその後も殆ど増えることがなく、結局、「協会」の運動は実を結ばず、ボストン大学が自らその教養学部で女性教授を任命する（1891年）まで時を待たねばならなかったのである<sup>31)</sup>。協会はその後、1894年に再び、女性教授の任命をボストン大学に要請し運動を開始する。今度は候補者の名前（1887年のボストン大学の卒業生で、当時、イェール大学大学院にて、最初の女性の大学院生として博士号を取得しつつあったエリザベス・ハンスコム）を挙げて、英語助教授のポストを要求している<sup>32)</sup>。だが、またしても「協会」の運動は成功せずに挫折してしまうのである。

## 5. 「協会」の運動への新たな評価の必要性とその視点

**先行研究における「協会」評価の問題点** 以上のように、「協会」の活動は、世間の関心を集めた女性教授講座設立運動について見れば、組織内部の結束を欠いた素人臭いものであり、所期の目的を達することなく、“華々しい”成果を挙げたとは言い難いものである。したがって、先行研究においては、「協会」の活動に対して、「その会員数は間もなく女性教育協会(Women's Education Association引用者注：ハーバード大学の門戸開放要求運動の結果として、ハーバード・アネックス [後のラドクリフ・カレッジ] の設立に成功) に匹敵するようになり、後にはこれを上回るようになったものの、女性の大学教育を支援するマサチューセッツ協会は、その初めの頃を別にすれば、女性教育協会が主催したような一連のプロジェクトに取り掛かることはなかった。それは間もなく、教育問題について講演者を招いての会合や、奨学金計画を維持するために会費を利用するというパターンに専念した」<sup>33)</sup>という、やや否定的な評価が行われている。だが、本論文の執筆者は、これは制度変革のレベルにのみ目を奪われた評価であり、以下に明らかにするように、このような評価の仕方では、この時代の様々な女性の高等教育拡大と支援の運動の意味を正当に評価することができ



ない、と考えるものである。

**女性の学生へのロール・モデルの提示** 上の先行研究でも言及されているように、「協会」が行った講演会は、ほぼ年4～6回の頻度で行われた。この公開講演会は、もともとは会員に学習機会を提供する内輪のパーラー・ミーティングであったものを規模を拡大し公開にしたものであった。そこに招かれた講師は文字通り一流の人々であり、本論冒頭で示したように、講演テーマも国際的であり、それはボストンという当時のアメリカ文化の中心地であるからこそ可能になったものであった。以下に、1890年度までに講師として登場した人々の一部を掲げる<sup>34)</sup>。

**\* 登場した主な女性講師たち** マリア・ミッチェル (1818-1889, 天文学者, ヴァッサー・カレッジ教授), ジュリア・ウォード・ハウ (前出), エレン・リチャーズ (1842-1911, 家政学・化学者, MIT教授), アリス・フリーマン・パーマー (1855-1902, ウェルズレイ・カレッジ学長), ケイト・ガネット・ウエルズ (前出), アバ・グールド・ウールソン (1838-1921, 教師, 著述家, 服飾改革家)

**\* 登場した主な男性講師たち** ローレンス・クラーク・シーリィ (1837-1924, 聖職者・スミス・カレッジ学長), アルフィーアス・ハイアット (1838-1902, 動物学者・ボストン博物学協会), ウィリアム・トリー・ハリス (1835-1909, 哲学者・教育者, 合衆国教育長官), キャロル・デヴィッドソン・ライト (1840-1909, 統計学者, 合衆国労働局初代長官), グランヴィル・スタンレイ・ホール (1844-1924, 心理学者, クラーク大学学長), フランシス・ウオーカー (1840-1897, 統計学者・経済学者, MIT学長)

講演はボストン大学が提供した会場において公開で行われた。「協会」の会員はもちろん、ボストン近郊の学生たちもその恩恵にあずかったのである。これらの講師たち、とりわけ女性の講師たちが女性の学生に与えた影響力を正確に特定することは不可能であろうが、女性の学生たちにとって得難いロール・モデルを提示したことは間違いないところであろう。もちろんこれは、例えば婦人参政権論者の講演を聴講した女性の学生たちが直ちに大挙して婦人参政権運動に加わるようになった、というような意味ではない<sup>35)</sup>。この時代は、女性が大学に籍を置くということだけで特別の目で見られたのである。1881年のスミス・カレッジの卒業生であり、カレッジ・クラブ (1890年に結成されたボストン在住の女性の大学卒業生の組織、後のアメリカ女性大学人協会AAUWの前身ACAのボストン支部と提携した) の初代書記をつとめたアリス・ブラウンは、当時の女性の学生が置かれた社会的立場を以下のように回想している。

「女性の大学生はあまりにも珍しいものであったので、人目を気にせずにいることはほとんど不可能でした。他の女性たちは、そして男性たちも、私たちのことを少々怖がっていたようで、お高いところに祭り上げようとしていましたので、私たちはいつも質を落としてはいけないと恐れていました。私たちは、母校の評判を高めることについて、そして、入学してくる人々すべてに対してその気品と卓越性を宣揚することについて、お互い同士で気を配っていました。私たちは、すばらしいことを成し遂げることを——生涯の仕事を持つことを！——期待されていたのです」<sup>36)</sup>。

当時ボストン大学の学生であったアリス・ストーン・ブラックウエル（1857-1950、『ウーマンズ・ジャーナル』編集者。婦人参政権運動の2つの組織AWSAとNWSAの統合に尽力）は、天文学者マリア・ミッチェルを天空に輝く星に譬えた詩をつくってその敬慕の思いを吐露して<sup>37)</sup>。強い自意識を持っていた高等教育「第一世代」の彼女たちにとって、自分たちの存在を肯定し激励してくれる人々とりわけ女性がいるということが、彼女らの学習にとって、さらにはキャリア選択に対して、いかに大きな力となったことであろうか。

「協会」は、また同時に、会員の前で女性の学生代表のエッセイを発表させる機会をもついたのである。これは、女性の学生たちにとっては、自分の思想を縦横に表現すると同時に、自分たちの姉や母親の世代の女性たちと懇意になり話を聞くまたとない機会であったはずである<sup>38)</sup>。

**女性の学生への物質的な支援活動の内容** すでに見たように、「協会」の主要な活動の一つは女性の学生へ奨学金の貸与・給付（マサチューセッツ州にあるすべての大学に在籍する女性の学生を対象）であったが、これは「協会」内に置かれた奨学金委員会によって行われていた。その額は、多くて100ドル弱から一時金としての数ドルまで様々であった。奨学金委員会の記録を読むと、奨学金を受けた女性の学生たちの苦闘の生活が彷彿とされる。お針子やウエイトレスまでしながら学ばねばならなかった学生、下宿代を節約するためにボストン郊外の自宅からの毎日長時間の電車通学によって健康を損ねた学生など、何故、これほど苦境にある学生が大学に入学したのかと不思議に思えるが、このことは、彼女らの出身が貧困な階層であったことを必ずしも意味するものではない。すなわち、もし男性であったならば、このような苦闘を強いられなかったのではないかと考えられるのである。「協会」の年報もしばしば指摘しているように、一般に家族の財源は先ず第一に男の兄弟のために使われるものであり、さらに女性には、母親とともに（あるいは母親に代わって）、家事を行い妹や弟の世話をするという義務や責任があったのである<sup>39)</sup>。また、同委員会報告の一つは、大卒女性の進路の調査結果に言及する際、女性が大学でリベラル・アーツを学習することとそれにそぐわぬ進路・人生選択という矛盾の問題にも触れている。教職以外の専門職が女性に対して開かれることを強く主張しつつも、同報告は、大学教育が「妻として母として隣人として」役に立っているという詳しい例証を紹介している<sup>40)</sup>。

「協会」の中には、この他に、前述の「教授講座委員会」や、「通信委員会」、「図書貸し出し委員会」等が置かれていた。

通信委員会は、女性の高等教育に関する内外の情報を収集し報告した。外国については、特にイギリスの事例——ケンブリッジ大学における女性の高等教育の嚆矢であるニューナム、ガートンの両カレッジについてなど——がしばしば言及されているが<sup>41)</sup>、その研究の対象はアメリカ・ヨーロッパを中心にはほぼ全世界に広がっている。情報の収集方法は、文献研究、自らの現地滞在体験（運営委員ほぼすべてがヨーロッパを中心に海外での生活経験があった）、外国政府へのアンケートなど多彩であった。厳密な研究という点では、例えば出典が明示されていないなどの問題点を指摘することが容易であり、裕福な有閑婦人たち——例えば委員の一人ネリー・ヒースは著名な出版業者D. C. ヒースの夫人であった——のディレッタンティズムと見えるかもしれない。だがこの委員会の報告には、昔の外国教育学（Auslandspädagogik）の手法に基づいて、州外・海外の女性の高等教

育に関する情報を、自分たちが目指す女性の高等教育改革のために利用しようという改革への熱意や、若い頃に高等教育を受けられなかった委員たちの旺盛な知識欲を伺わせるものがある。

図書貸し出し委員会は、教科書や参考書を購入することが困難な女性の学生のための貸し出し図書の設置と運営を行った。これは同時に、そこに司書とその助手として雇われた女性の学生たちに給料を払うことで援助の機会を与えることにもなったのである<sup>42)</sup>。

**より濃やかな支援活動への評価の必要性** さらに「協会」は、ともすれば物憂い灰色のものになりがちであった女性の学生の生活を彩り快適なものにするための支援を行った。当時の学生は「協会」の支援活動を次のように回想する。「協会」は、ボストン大学内に、女性の学生が会合を行い疲れた身体を休めることを可能にするレセプション・ルームを寄付しただけでなく、しばしば行われた社交の集まり、会員の家庭への招待、個人的な慰めなど、「多くの点で制約された生活の中で新しいできごと」を提供したのであり、「これらの援助のどれもが、この協会の存在のゆえに若い人々と年長の人々との間につくりだされた心優しき絆がなければ、与えられることがなかったであろう」と<sup>43)</sup>。さらには、ボストンに不案内な女性の学生のために下宿を世話する委員会の設置(1883年、通学の時間を減らし下宿の経費を減らすために、6人の学生が一つの下宿に一緒に住むという試みを行っている)や、体育に関する委員会の設置(1883年)が行われている<sup>44)</sup>。この後者の委員会は、大学における体育施設の充実を訴え、衛生・衣服・食事等についての健康講話や講習会シリーズの開催を行っている。高等教育は女性の心身に有害な影響を及ぼし、その生殖能力——女性のレーゾン・デートルそのものと考えられていた——を損なうという、当時の女性の高等教育への有力な反対論<sup>45)</sup>の存在を考えれば、女性の学生の健康面への配慮は「協会」にとって極めて重要な課題であったのである。

このように「協会」の活動は金銭を通じた直接的な援助とともに、あるいはそれ以上に、より濃やかな精神的で知的な援助を重視したのであり、本論文の執筆者は、「協会」の運動のこの側面こそ、「協会」による女性の高等教育拡大と支援の運動の意味を正當に評価するために注目すべきであると考えたい。すなわち、「第一世代」の女性たちは、何故、ジェンダーについての自覚的思考が可能になり自分たちの社会的使命を自覚したのか、という本論文の冒頭で設定した課題への解答の鍵はここにあると考えるものである。

## 6. 「協会」の知的遺産の評価の必要性

**「女性的」運動の特質** 「協会」の活動は、政治改革や制度の大きな変革という点から言えば、人目につかぬ地味なものであったかもしれないが、それはむしろ「協会」が敢えて望んだことなのである。「協会」の年報は言う。「協会の目的は、単にお金を贈るという形で——確かにそれはしばしば必要なことではあるが——彼女たちが進む途を滑らかなものにするだけではなく、賢明な忠告や役に立つ激励、時機を得た同情によって、彼女らの最も真剣な目標の達成を助け、女性的特質(womanly qualities)の健やかで調和のとれた発達をもたらすことにあるのである」<sup>46)</sup>。「その仕事の多くの部分は静かにそして目立たぬように行なわれなければならない。……直接的な施し

を行うという仕事と同様に、本協会は、もう一つの目的（引用者注：女性の高等教育一般の振興）をも静かに、これ見よがしにならぬように行わねばならないのである<sup>47)</sup>と。では、どうして「協会」は、女性の高等教育の拡大と支援の運動を「静かに、そして目立たぬように」行わねばならなかったのか。それは、この時代にはまだ奨学金などで援助を受けるということが決して当たり前のことではなく、物質的な施しを受けることは恥ずかしいことであると思っていた女性たちもいたという理由もあろうが<sup>48)</sup>、その最大の理由は、この「協会」に属する特に年長の人々にとっては、女性にとって家庭こそが主要な責任を負うべき「女性の領域」であり、女性の社会的活動は世間の注目を浴びることなしに行われるべきものと考えていたからなのである。この点のみを見れば、「協会」の運動は、ボストン・ブラーミンに属する有閑婦人たちの穏健で慈善的な精神運動であったと結論付けることもできるかのように見える。だが、彼女らは、「真の女性らしさ」の教義から全く抜け出せなかった家庭婦人ではなかった。確かに彼女らは、女性教授に対してさえも「女性的なデリカシー」を要求するというように、また、大卒女性が多くプロフェッションに進出することを主張しつつも大学教育は「妻として母として隣人として」役に立つと論じるように、女性には男性とは本性的に異なった「女性的資質」が存在することを当然の前提とする人々であった。しかしこれらの女性たちは、女性教授講座設立の運動に典型的に見て取ることができるように、明らかに社会変革への意思と活力を示した人々であった。ブレイカーは、この時代に女性クラブの運動で活躍した人々を指して、「その本心はフェミニスト (feminists under the skin)」であったと評価したが<sup>49)</sup>、この評価は「協会」に集った女性たちに対しても当てはまろう。婦人参政権の獲得をはじめとして多くの社会変革を成し遂げるようになる従来の意味でのフェミニストはまさに「第一世代」の中から育っていったわけであるが、そのためには、「協会」の女性たちのように、外面では伝統的な「真の女性らしさ」を信奉しつつも「女性の領域」の規定に対して疑問を投げかけ、これを拡大し変革することを目指して、政治的な、文化的な、そしてとりわけ教育的な様々な活動を行った人々の活動が大きな意味を持っていたと考えられるのである。

**「第一世代」への遺産とその継承** それでは、「協会」が19世紀のアメリカの高等教育史に残した知的遺産とは何であり、それを私たちはどのように評価すべきであろうか。「協会」の第一の知的遺産は、女性の高等教育の拡大と支援のためには、まず何よりも、女性による女性のための教育的配慮が必要なことを示したことであろう。今日、私たちは、もしも女性と男性とに平等な教育を望むとするならば、ジェンダーの問題について常に敏感でなければならないことに、したがって、両性に同一の教育機会を保証するだけでは不十分であり、ある場合には女性（あるいは男性）のみが必要とする特別な教育的配慮というものがあることに気が始めている<sup>50)</sup>。「協会」の運動を行った女性たちは、たとえジェンダーという概念を知らなかったとしても、女性の学生に対しては、ただ単に男性と同じ教育機会や金銭的な援助を与えるのみでは不十分であり、特別な教育的配慮を必要とするということに気付いたのである。「協会」の年報は言う。女性の学生たちが直面する困難は、学生自身の過失によって起こるものではなく、彼女たちの置かれた精神的・物理的状況を知悉して助言を与えるという配慮を行う年長の女性がいなかったということが原因である。まさに「協会」が肩代わりしているこのような配慮を行う女性は、「教授陣が圧倒的に男性で占められている男女共学の教

育機関では特に望まれるもの」<sup>51)</sup>である。こうして、同年報は、共学大学における女子部学生部長 (Dean of Women) の必要性を訴えるのである。

「協会」の第二の知的遺産は、「協会」が、上記のような意味での女性の高等教育の拡大と支援のための——そして、その結果として、大学卒業女性とプロフェッションとの間を架橋させるための——運動の一つのモデルを提供したことであり、変革への願いを新しい世代へと明確な形で託したことであろう。実際、このような変革への願いを託された女性の高等教育「第一世代」たちは、女性の高等教育、およびその高等教育を受けた女性の社会的地位の変革のために、女性による女性のための、より大規模でより強力な運動を組織するようになるのである。「協会」のキー・パーソンであったエミリー・タルボットと娘のマリアン (Marion Talbot, 1858-1948, 1880年ボストン大学卒) の着想にもとづいて、現在のアメリカ女性大学人協会 (American Association of University Women, AAUW) の前身である女性大学卒業生協会 (Association of Collegiate Alumnae, ACA) の結成が行われたのは1882年1月14日のことであった<sup>52)</sup>。ACAが結成間もなく行った事業が、全国の女性大学卒業生の健康調査であり、女性の学生への奨学金制度の実態調査であった<sup>53)</sup>ことは決して偶然ではない。エミリー、マリアンの母子にとって、この問題は、既に「協会」の活動の中でその重要性を痛感していたものであったのである。

マリアン・タルボットは、1892年にハーパー学長に招かれシカゴ大学に赴く直前まで、「協会」と同時に、この新しいACAという組織の運動——アメリカの女性高等教育史を語る上で言及せずに済ませることはできない運動——に深く関与するようになるのであるが、彼女のシカゴ大学でのポストは、公衆衛生学 (sanitary science) の助教授であると同時に、まさに「協会」がその必要性を力説した女子部学生部長であったのである。

## 注

紙幅の関係で、マニュスクリプト・年報等の特殊資料の所在は以下に示す略号を用いる。

BPL: Boston Public Library ML: Mugar Library, Boston University SL: Schlesinger Library, Radcliffe College WL: Widner Library, Harvard University.

- 1) MSUEW, *Fifteenth Annual Report*, January 1982, p.6. Box 7, MSUEW Archives, ML.
- 2) 「協会」の第3～第18までの『年報』(これらはすべてBox 7, MSUEW Archivesに所在) 末尾の会員リストを参照。それぞれの女性の経歴については, Edward T. James et al. Eds., *Notable American Women, 1607-1950 : A Biographical Dictionary*, Cambridge, Mass. : Belknap Press of Harvard University Press, 1971, 3 Vols. を参照。
- 3) Jill K. Conway, "Perspectives on the History of Women's Education in the United States," *History of Education Quarterly*, Vol.14, No.1, (Spring 1974), pp.1-12., Conway, "The First Generation of American Women Graduates", Ph.D. Thesis, Harvard University, 1968, pp.536-539.
- 4) Patricia Palmieri, "From Republican Motherhood to Race Suicide: Arguments on the

- Higher Education of Women in the United States,” C. Lasser (Ed.), *Educating Men and Women Together: Coeducation in a Changing World*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1987, p.55. また, Barbara Miller Solomon, *In the Company of Educated Women: A History of Women and Higher Education in America*, New Haven: Yale University Press, 1985, pp.44-45をも参照。
- 5) この問題については, 拙論, 「アメリカ高等教育史におけるジェンダーの問題」, 大学史研究会編, 『大学史研究』, 第5号, 1989年, pp.15-21を参照されたい。
- 6) 同様の指摘はEllen Condliffe Lagemann, *A Generation of Women: Education in the Lives of Progressive Reformers*, Cambridge: Harvard U. P., 1979, Chap. 6 参照。
- 7) タルボットとマッギルについては, 注2) の*Notable American Women*を参照。チャニングについては, Helen Cartwright McCleary, “Eva Channing,” *Boston Evening Transcript*, April 12, 1985. 参照。
- 8) このイデオロギーの二面性については, 例えば, Lori D. Ginzberg, *Women and the Work of Benevolence: Morality, Politics, and the Class in the Nineteenth Century United States*, New Haven: Yale University Press, 1990, pp.2-7を参照。
- 9) Rosalind Rosenberg, *Beyond Separate Spheres: Intellectual Roots of Modern Feminism*, New Haven: Yale University Press, 1982, p.3.
- 10) William Leach, *True Love and Perfect Union : The Feminist Reform of Sex and Society*, New York : Basic Books, 1980, pp.314-315.
- 11) Julia Ward Howe, *Reminiscences, 1819-1899*, Boston: Houghton and Mifflin, 1899, pp.64-86. BPL.
- 12) Julia A. Sprague, *History of the New England Women’s Club from 1868 to 1893*, Boston: Lee and Shepard, 1894, pp.2-5. SL.
- 13) Karen J. Blair, *The Clubwoman as Feminist: True Womanhood Redefined, 1868-1914*, New York: Holmes & Meier Publishers , 1980, p.34. 同州には1894年に166もの多様な女性クラブが設立されていた。J. C. Croly, *The History of the Woman’s Club Movement in America*, New York : H. G. Allen & Co., 1898, p.591. SL.
- 14) Sprague, *History* , pp.17-18; Ednah D. Cheney, *Memoirs of Lucretia Crocker and Abby W. May*, Boston: Massachusetts School Suffrage Association, 1893, pp.29-30. SL.
- 15) Solomon, *In the Company of Educated Women*, p.51.
- 16) *Boston University Year Book*, Vol.1, 1874, p.25. University Archives, ML.
- 17) Harriet H. Robinson, *Massachusetts in the Woman’s Suffrage Movement*, Boston: Roberts and Brothers, 1881, p.45.WL.
- 18) Ednah D. Cheney, “The Women of Boston,” J. Winsor (Ed), *The Memorial History of Boston, Including Suffolk County, Massachusetts. 1630-1880*, Boston: Ticknor & Co, 1881, Vol.4, pp.331-332. WL.

- 19) Barbara Welter, "The Cult of True Woomanhood: 1820-1860," in Welter, *Dimity Convictions*, Ohio University Press, 1976, pp.21-41.
- 20) MSUEW *First Annual Report, January 1877*. pp.5-6.; "The Charter of the Massachusetts Society for the University Education of Women," Box 1, MSUEW Archives.
- 21) "A Woman's Professorship," *Boston Daily Advertiser*, Undated Newspaper Clipping, MSUEW Newspaper Clippings, Box 2, MSUEW Archives.
- 22) "Endowment of a Woman's Professorship in Boston University College of Liberal Arts," Undated leaflet, Box 7, MSUEW Archives.
- 23) James Freeman Clark to Emily Talbot, dated January 10, 1878. Emily Talbot Correspondence File, Talbot Family Archive and Correspondence, Special Collection, ML.
- 24) *Woman's Journal*, Vol.9, No.13, March 30, 1878, p.101. SL.
- 25) *New England Journal of Education*, Vol.7, No.15, April 11, 1878, p.232. BPL.
- 26) Elizabeth Stuart Phelps to Emily Talbot, dated January 7, 1878. Emily Talbot Correspondence File, Special Collection, ML.
- 27) MSUEW Minutes, April 6, 1878, Box 4, MSUEW Archives. ML.
- 28) MSUEW *Second Annual Report, January 1879*, p.9.
- 29) "A Woman's Professorship," *Woman's Journal*, Vol.10, No.5, February 1, 1879, p.33. SL.
- 30) *Third Annual Report*, January 1880, p.12.
- 31) Warren. O. Ault, *Boston University: The College of Liberal Arts, 1873-1973*, Boston: Boston University Press, 1973, p.20. ML.
- 32) MSUEW Minutes, May 3, 1894, Box 4, MSUEW Archives. ML.
- 33) Patricia King, "The Campaign for Higher Education for Women in 19th-Century Boston," *Massachusetts Historical Society Proceedings*, Vol. 93, 1981, p.78.
- 34) 1890年度までの「協会」年報より抜粋。
- 35) 当時の女性の学生の一人は回顧して言う。女権運動の講演に「晒されたことで、女性の学生たちに好ましくないことが起こるといったことは全くなかったので、大学当局はその大胆な政策の正当性を確認したのであった」。Smith, Mabel S. C. "Retrospectus," Boston University College of Liberal Arts Class of 1887, 1887-1937, (Published by the Class of 1887), p.2. ML.
- 36) S. Alice Brown, "Early Days of the College Club," MS, Vol. 29, Carton 3, The College Club Papers. SL.
- 37) Alice Stone Blackwell, "Maria Mitchell," *Beacon*, Vol.8, No.4, 1883, p.37.
- 38) Smith, "Retrospectus," p.11.
- 39) MSUEW *Seventh Annual Report, January 1884*, pp.5-6, 9.; *Nineth Annual Report, January 1886*, p.10.
- 40) MSUEW *Third Annual Report, January 1880*, p.8.
- 41) MSUEW *Seventh Annual Report, January 1884*, p.14.

- 42) MSUEW *Sixth Annual Report, January 1883*, p.7.
- 43) Mary Hinckley Dearing, "A Short History of Massachusetts Society for the University Education of Women," MS, Carton 1, Mary Hinckley Dearing Papers, Special Collections, ML.
- 44) MSUEW *Eighth Annual Report January 1885*, pp.9-10.
- 45) 拙論, 「女性の高等教育の Historiography: ジェンダーの問題は能力観の問題にどうかかわっているか」, 平成1-2年度科研費総合研究A 『アメリカ高等教育における制度変革と能力観とに関する史的研究』(代表・国際基督教大学・立川明) 研究成果報告書所収, 1991年, pp.176-193, 特に pp.189-191. 参照。
- 46) MSUEW *Seventh Annual Report, January 1884*, p.6.
- 47) MSUEW *Sixth Annual Report, January 1883*, p.8.
- 48) Maria Mitchell, "The Collegiate Education of Girls," *Education*, Vol.2, No.5, May 1881, pp. 433-438.
- 49) Blair, *The Clubwoman as Feminist*, p.1.これらの女性たちをプレイヤーは Domestic Feminism の信奉者であったとする。Cott, *Bonds of Womanhood*, p.125 ff. も参照
- 50) この論点は, David Tyack and Elisabeth Hansot, *Learning Together: A History of Coeducation in American Schools*, New Haven : Yale U. P., 1990, pp.243-278. 参照。
- 51) MSUEW *Twenty-Second Annual Report, January 1899*, pp.8-9.
- 52) Marion Talbot, *The History, Aims and Methods of the Association of Collegiate Alumnae*, ACA Publications, Series II, No.42, p.2, 1893, AAUW Archives, SL.
- 53) ACA, *Physical Education*. Leaflet, 1882. Vol.1, Carton 1, AAUW Archives. SL. Elizabeth D. Hanscom, *The Administration of Collegiate Beneficiary Funds and Scholarships*, ACA Publications, Series II, No.39, 1893; *Compensation in Certain Occupations of Women Who Have Received College or Other Special Training*, ACA Publications, Series II, No.56, 1896, AAUW Archives. SL.



## The Campaign for Higher Education for Women in Late 19th-Century Massachusetts

Tatsuro Sakamoto\*

This paper explores some ways in which the energy and enthusiasm of a generation of Boston women were organized and their influence exercised on behalf of higher education for the first generation of college women in late 19th-century. The paper examines the activities of the Massachusetts Society for the University Education of Women as a case study.

The Society was organized in 1876 by a group of ladies whose affiliations and interests gravitated toward Boston University. Their purpose was to help women students who needed scholarship, as well as to aid the general effort for advancement of the status of women.

In 1878, The Society undertook a project to raise \$40,000 to endow a professorship for a woman at Boston University. This effort was eventually unsuccessful, since, by the 1880, it raised only some \$3000.

Due to the failure of this project in its early years, the role which the Society played for the promotion of higher education for women was somewhat negatively evaluated in conventional interpretations.

This author, however, maintains that, to understand the role of the various women's groups organized to promote higher education for women in the late decades of the 19th century, it is important to look at other kinds of activities of these groups. Since the ladies of the Society thought domestic responsibilities as the proper and the first obligation of a woman's life, they carried on much of the Society's work "quietly and unobtrusively".

The society sponsored a public meeting featuring eminent women speakers such as Julia Ward Howe, furnished a young ladies' reception room at Boston University, and established a loan library for the use of women students who could not afford expensive textbooks. Besides providing these services, there was frequent rendering of social courtesy, invitation to members' homes, and personal amenities.

---

\* Associate Professor, Soka University (Affiliated Researcher, R. I. H. E.)

This author highlights those aids that not only fostered the kindly bonds between the ladies of the Society and the first generation of college women but also encouraged the women students to raise their consciousness for social reform. The society was, in fact, a forerunner of the organization such as American Association of University Women (Association of Collegiate Alumunae in those days) that united these women graduates.

The principal primary sources used in this study are archival materials located in libraries and archives in the Boston area.